《出席者》（年齢順）

中嶋　嶺雄
（東京外国語大学助教授）

堺屋　太一
（作家・誌上参加）

牛尾　治朗
（ウシオ電機社長）

木村尚三郎
（東京大学教授）

（司会）公文　俊平
（東京大学助教授）

▲公文　俊平氏

▲牛尾　治朗氏

昭和世代 座談会

〝クラゲ社会

さきの総選挙で〝新自由クラブ〟があれほど躍進すると予想した人は　ほとんどいないだろう。だが　その底流には自民離れ現象とともに　新旧交代の大きなウネリがあったことを見逃すことはできない。今後　こうした新しい世代の台頭が日本社会にどんな影響を与えるのか。また　国際社会で苦境に立ちつつある日本が　これからどう対処したらよいのか。昭和世代きっての論客にお集まりいただき　日本の進路を大いに語ってもらった。（編集部）

だれに〝バトンタッチ〟すべきか

公文　きょうお集まりの方々は、1930年代の生れで、36歳から45歳の年齢域にほぼはいる方々です。ところで、30年前の第2次世界大戦直後を振り返ってみると、その当時、日本の指導者的な立場にあった年長者が公職を追われ、代わって戦後復興のけん引役を果たしたのが、1900年代の生れ、当時の36歳から45歳――つまり、現在の66歳から75歳の年齢域になっている人たちです。ということは、一般的な年齢でいえば、新たな世代交代の時期がきているのではないか。

そこで、かつての世代交代の主役者とほぼ同じ年齢域にあたる現在の1930年代生れが、世代交代の問題をどう考えているか、今日の社会、政治、経済、あるいは文化といった諸問題をどうみているか、皆さんのご意見をお聞きしたい。

木村　これからの日本は国際社会のなかで、苦しい立場に追い込まれていくと思う。国際経済の面で世界のリーダーシップをとっていくのは、ヨーロッパ、ソ連、中国、アメリカといった、いわば大陸型の国家です。それと同時に、昨年11月のアメリカ大統領選挙におけるカーターの勝利は、日本にとって、決してプラスとはならない。その理由は、カーター大統領の誕生が、いままでのアメリカのグローバリズムを後退させ、国内を外から守るという内部志向型の意識が強まる可能性があるからです。

アメリカのグローバリズムの後退、ECにおける対日貿易不均衡問題をはじめ、資源、エネルギー、食糧といった問題のどれひとつをみても、日本が国

▲木村　尚三郎氏

▲堺屋　太一氏

▲中嶋　嶺雄氏

日本〝を斬る

際経済のなかで生きていく、その前途はひじょうに多難といわざるをえない。

こう考えると、これからの日本を率いていく人は平時型ではなく、乱世型の人間だと思う。その点からいうと、私がかねがね尊敬しているのは明治生れの70歳前後の人たちだ。

昔、江戸時代の儒者、海保青陵は「親は苦をする子は楽をする、孫はこじきをする」という言い方をしたが、苦労を経験している時代には世界が見える。だいたい、親から孫まで30年の間隔があって、世界がみえる世代が出てくるものだ。つまり、明治生れの70歳前後の人たちが苦労をした親、楽をした時代が大正生れの人たち、孫でこじきを経験したのが現在の40歳代だと思う。その意味で、40歳代の次に期待される世代は10歳代、とりわけ小学生から中学生の人たちです。20歳代、30歳代の人たちはどうせ働かないのだから、40歳代ががんばって70歳まで働こうじゃないか、となるのが私の意見です。

中嶋　世代論については、木村さんの意見に賛成です。私などは、中国の政治史をみて、いつも感ずることはジェロントクラシー（老人政治）、つまり、中国政権は老人支配、俗に老害だ、といわれるのだが、中国革命を達成した時期に、当時の40歳代の人たちが大きな仕事を成しているわけで、今日でも、彼らにしてみれば、若い者にまかせられぬという気があるのではないか。

同じことが日本の政治をみてもいえると思う。現在の70歳代の政治家の場合、戦後の混乱期を自分たちの手で乗り切り、戦後の高度成長を実現させたというある種の使命感が依然として、脈打っているとすれば、年齢的には交代期がきたといっても、若い世代が簡単に彼らに代われるとは思えない。

〝明日は今日より豊かな時代〟は終わった

牛尾　終戦直後の世代交代は、歴史的にはアメリカという外部の力による〝棚ぼた式〟の珍しいケースにすぎない。もともと、世代交代というものは、交代を要請する社会的基盤が50％ぐらい充満したときに、新しい世代が勝ちとるものであり、戦って勝ちとったものでないかぎり、世代交代のダイナミズムは絶対に出ないものだ。

今日の社会状況を見ると、明らかに世のリーダーシップのあり方が本質的に変化することを望む国民の期待は大きいと思う。企業の世界においても、政治の世界においても、過去の時代の沈潜が始まり、新しい時代に転換するよどみに入っている。これから5～6年間が本質的な変化をみつめて、新しい時代の展開に真剣に取り組む時期だと思う。

そのひとつの反省材料として、経営者はたとえば昭和45年から49年に起きた、いわゆるニクソン・ショック、過剰流動性、石油ショックといった国際経済の波のなかに巻き込まれたことを考えてほしい。そこでの教訓は何か。ひとつは、よい製品を安価に供給できれば、市場は無限であるという自由主義経済の正義はあり得ず、大きな国家エゴイズムがあること、もうひとつは外貨を大量にもてば、資源はつねに買手市場であるというのが、妄想だったということだと思う。

だが、こうした教訓があったにもかかわらず、一昨年から昨年にかけての経済活動は、相変わらずかつてと同じパターンで、なりふりかまわず海外市場に進出することを繰り返しているわけだ。今後の輸出、とりわけ先進国との輸出問題では高度な商人的交渉力を駆使して処理しなければならないだろう。

堺屋　日本が今後国際社会のなかでより苦しい環境に置かれるだろうという点は賛成ですが、世代論では多少見かたが違います。つまり、私たち自身の世代、1930年代生れの世代に対して、それほど自信もないし、ロマンも抱いていないということです。

私たちの世代は、ひじょうに苦労していない。幸運に恵まれ、まことに幸せに育ってきたと私は考えています。確かに私たちの世代は幼少期に戦中戦後の困窮時代を過ごしたわけだけれども、豊かな生活を経験する前に貧しい生活を強いられたので、それほど苦労は感じなかったんじゃないか、と思うんです。そして、自らの責任で家計を持ち、生活を営むようになってから、平和と高度成長が続いたので、何の苦労もなく年々所得と生活水準が向上したわけです。人間の困窮感というのは、大部分相対的なものだから、前よりもよくなる時には幸福感が大きい。逆に昔より貧しくなったり、隣近所より生活が低かったりすると、絶対水準が高くとも、貧困感にさいなまれるもんです。

そういう意味では、私たちの世代は、戦場に駆り出されることもなければ、不況に苦しめられることもなかった。そればかりか、みんなが「明日は今日より豊かであろう」という、人類史的にみると、きわめて野心的な夢を持つことさえできた。まことに幸せな世代だったと思います。

▲公文　俊平氏(左)と木村　尚三郎氏

したがって、「われわれの世代が、今の70歳前後の世代に代わってこれからの日本を背負うべきだ」というのも、"べき"論としては分かるけれど、実際にそれに耐えられる実力があるかどうかということになると、疑問に思うんです。

事実、財界でも政界でも、今から10年ぐらい前には、もう大正時代、1920年世代が、かなり台頭していたけれど、10年たった今、1930年世代はそれほど出ていないですね。将棋や囲碁の世界では、大正時代から戦後時代に活躍している人が飛んでいる。

もっとも、だからといって、われわれの次の世代、今の30歳前後がいいかといえば、これはもっとだめかもしれない。とにかく、この世代、つまり戦争直後に生まれた"団塊の世代"は、われわれ以上に苦労知らずで育っているからです。

そういった意味で、国際環境ばかりでなく、日本人自体の主体的条件からみても、これからの日本は楽観できないと思います。

変わるアメリカの世界戦略

公文　堺屋さんのご意見は、他のお3人の方に比べて、1930年代生れの世代への評価に多少きびしい点があるようです。しかし、40年代が50年代生れと

の比較でいえば、まだしも苦労しているだけましだという点では、見方が一致しているともいえますね。ここで世代論をひとまず離れて、世界に目を向けてみたい。

さきほど、木村さんは現在のアメリカが過去にもっていた一種のユニバーサリズムを失いつつある。いいかえるならば、彼らの世界を見る目が曇ろうとしている。そのことが危険だと、指摘されたわけですが‥‥。

木村　逆説的にいえば、いま日本は世界的にひじょうなプラスの条件の下におかれているわけです。その理由は、大陸国家では自国なり、地域社会の利益を守ろうという動きが強まってきている。少なくとも、内に目が向いているかぎりは、世界全体がみえない。

ところが日本は特定の国と結び得ない。日本を取り巻く世界の状況は厳しいけれども、世界が見える立場、つまり、世界平和の調整役になり得る立場にある。

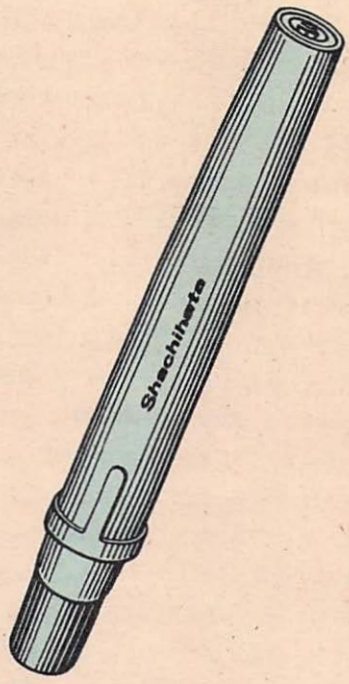
中嶋　アメリカの世界政策をみていると、伝統的にグローバルであろうとする側面があると同時に、孤立主義的な側面がアンビバレントにあるわけです。ソ連の場合は、拡大主義という体質とともに、一国社会主義的な回帰がみられる。その点で、アメリカとソ連は対照的でありながら、共通性もある。

もう少し詳細に説明すると、この数年の間、ソ連はソ連社会主義のイメージの低下、あるいは国際共産主義の分裂と、さまざまな経験のなかで、ここにきて、もういっぺん、国内を固めようとする方向がみられるような気がする。たんに農業政策が失敗したからといった単純な理由ではなく、ある種の〝あなどりがたさ〟をもっている。

アメリカについても、同様なことがいえよう。アメリカはベトナム戦争で大きな傷を受けたからという形ではなくて、ある種の回帰が行なわれている。もっとも、それは単にアメリカ的な孤立主義への逆戻りじゃないんですね。そこに成熟があると思う。われわれはアメリカやソ連を単純な形で見すぎてはならないと思う。

たとえば、ソ連の反体制運動をみていても、ソルジェニツインは困るけれども、メドベージェフあたりは、ソ連のなかで公認しておこう、党員のなかで彼らについては暗々裏にわかっているようなところ

日本人のネーム。小型版。



㊥ 1本・600円(別注もございます)

小粒でも中味が濃いのがミニネーム。ご存じネームがそのまま6ミリの小型になりました。小さくても朱肉いらずにポンポーンと。訂正印として広く使えるのが嬉しい「小さな名前」です。お求めは印章店・文具店・デパートで。

シヤチハタ
ミニネーム

シヤチハタ工業株式会社・名古屋市西区上堀町65

がある。ある意味で、ソビエトのなかに市民社会的な西欧型の成熟が徐々に出てきていると思う。

公文　アメリカやソ連が目を内に向けつつあることは、かえって、その〝あなどりがたさ〟を示すものでもあるという中嶋さんのご指摘ですが、木村さんはこの点をどうお考えになりますか。

木村　アメリカも大きく変わりつつあると思う。それは第2次世界大戦のアメリカの態度をみると、ナチスに対抗してソ連に味方した面はあるが、必ずしもソ連に味方したとは、とても思えない。もしソ連が勝ちそうになれば、ナチスに応援したほうがいいというトルーマン上院議員の発言をみても、つまり、アメリカはヨーロッパ全体を敵視した面がある。だからこそ、戦後、冷戦が始まるわけです。

つまり、アメリカは1920～30年代から、ひとつのアメリカを実感するようになってきた。それとともにヨーロッパを冷たい目でみはじめ、ヨーロッパ諸国の力が大きくなってくると同時に、ひとつのヨーロッパに対して自分を守るという意識が強くなってきた。だからこそ、たとえば、フランスのドゴール大統領は必死になってアメリカとソ連の間にクサビを打ちこもうとした。最近でいえば、世界性を標ぼうする多国籍企業とアメリカ政府とのキレツがその表われといえる。国益と多国籍企業の利益が相反する場合、国益を守らねばならないという態度が出てきている。

国連でのアメリカの地位の低下とか、ベトナム戦争の失敗が世界性の喪失とまではいかないまでも、世界を見る目が少しずつ曇っているのではないか。その分だけ、日本に対しても、軍備費の増強とか、もっと工業製品を輸入せよとか、いろんな要求が出てくると思う。

牛尾　昨年、ECとの対日貿易均衡問題のなかで、アメリカのEC派遣大使はECの強い日本批判に対して、日本を擁護する発言をみせたが、今年は絶対にそうじゃないと思う。逆に、今年の後半にはアメリカが昨年のECと同じ態度にでてくる可能性があるかもしれない。

少なくとも、カーター大統領の日本に対する見方は、アメリカとほぼ同じレベルの国力を持つ国だ、というものだ。これまでは、たとえばケネディ大統領時代、とにかく対日外交はライシャワー大使を派遣して、特殊な日本の専門家に任せたわけだ。ところが今度は、日本の特殊性を強調する、いわば甘えを前提とする外交関係は期待できない。

秩序ある輸出は〝愚の愚〟

公文　皆さんのご意見を伺っていると、いずれにしても本当の乱世はこれからはじまる、といった気がしてきます。たとえば、ECとの貿易交渉ひとつをとっただけでも、いろいろと困難かつ微妙な問題が含まれているように思います。それでは、日本なり日本人が、これからの乱世を生きぬくための方策について、ご意見をお聞かせください。

牛尾　国際社会のなかで、日本がどう生きるかを考える場合、まず日本だけが言葉も、発想も、他の国とルールがまったく違っていることを認識しなければならない。

文化人類学者の表現を借りるならば、英国は犬、フランスはサル、アメリカは馬と、いずれも四つ足の動物だ。ところが、日本だけはクラゲだ、ということです。クラゲはクラゲなりの論理をもっているが、その次元が違うわけです。

そこで、とりあえずこの先の10年間、国際社会での発言は〝四つ足〟ルールでやらざるをえない。クラゲが国際社会の舞台で過半数を占めるのはまだまだ先になる。現時点では、クラゲはクラゲでいいじゃないか、という妙な愛国心でスネちゃいかん。

木村　ただ、現在の日本において四つ足動物の論理で世界を見られる人間はごく一部の人たちだと思う。やはり、クラゲ社会のもつあたたかいふん囲気のなかで生きたい人は多数派だ。だから、〝四つ足動物〟型の人間を頭にすえて、〝軟体動物〟型の人間を部下につければいい。

牛尾　いままでの一流のエリートはクラゲ・エリートなんです。四つ足動物エリートは二流として遇されてきた。

木村　もう少しエリート再評価をやらねばならない。これはアメリカでの話ですが、たとえば都市計画。都市計画というものは地域住民全部がいろんな発言をしたのではできなくなる。いまいわれているのが、都市計画をするにはだれか1人の専制君主的かつ寛容な頭脳が必要だということです。ヨーロッパでも、権限を下へ下へ降ろせば、事たれりとするのではなく、社会の結節点、結節点にはエリートが

▲牛尾　治朗氏(左)と中嶋　嶺雄氏

必要だという認識がでてきてますね。

牛尾　四つ足動物の場合、愛情を表現するのにかんだりするが、かまれるとクラゲはやられたと思ってベシャッとしちゃう(笑)。じゃれてるのかもしれないんですよ。

昨年のＥＣ問題でも、あんまり鉄鋼を輸出するなと、じゃれているのかもしれない(笑)。どう対応するのか。簡単な方法は、クラゲも四つ足動物にじゃれつけばいい。そのくらいの余裕をもって、堂々とやれば心配はない。

木村　ＥＣが日本に文句をいってきたことは喜べばいいんですよ。ヨーロッパ人はもう相手の存在が許しがたいとなると、黙ってビシャッとやる。けんかをしかけるときは、対話をして、共存の道を捜したいと思っているんですよ。それにこっちが乗ってあげなくちゃ。

牛尾　洗練された仲間同士の会話のなかに、あまりにも素朴な人間がいて、ちょっと冗談をいったらその人は憤慨して帰ったという場合、その場がしらけちゃうことがある。こういう感じに、日本の立場が国際社会、とくに先進国との間でなってはならないと思う。

木村　本当にそうですね。日本は輸出が問題になると、すぐにオーダリー・マーケティングといいますが、あれは愚の愚だと思う。外国人はオーダリー・マーチング（秩序ある行進）といってますよ。

牛尾　こういった言葉の美学で現実をごまかすのはクラゲ社会だけに通用する論理にすぎない。四つ足動物の論理では、協調というのは全面降服だし、競争は公正にやることだ。

中嶋　クラゲと四つ足動物との違いを認識すれば、日本の国際政策は複雑かつ多角的な戦略において対応しなければならなかった。それがひじょうに単純な対応でありすぎた気がする。もっとも、これまでのある種の乱世の経験がなかったといえば、そうなのだが‥‥。

その点では、企業はこれから日本の大きなリーダーシップをもって、日本そのものの国家目標の先頭に立っていくと思われるだけに、財界人は単細胞的な発想で海外にでていくことは避けるべきだ。それをやることは、アメリカかソ連といった大国に対して日本が付合い方、ルールを知らないことになる。ルールを知らないことは同時に、日本としての戦略をもたないことになると思う。

牛尾　現在、日本においてかなり国際化された企業で最大の壁は現地生産の問題です。その前の時代は日本のセールスマンがアフリカの山奥までも行って、製品を売りまくっていたときです。その時は、実によくがんばった。その段階では国際社会で日本の行動原理が通用する自信をもつのだが、次の段階で、現地で生産すると、なぜか現地主義の必要性を痛感しはじめるわけです。

彼我の違いはどこにある

木村　要するに、いままでの日本では、企業活動もクラゲ型だと思う。日本に本拠地があって、触手を海外にパッとだす。まずいと引っこめる。

私は思うんですが、イギリス人は第２次世界大戦までインドを植民地支配して、搾取していた。にもかかわらず、エリザベス女王が訪印すると、インドの国民は歓迎するわけだ。ところが日本の場合、東南アジアで一生懸命に経済援助とか、経済復興に協力しているのに、商社をはじめ在外の企業は石をぶつけられる。

彼我の差がどこにあるか。やはり現地に永住する気があるかないかだ。永住すれば、道路をはじめ病院も建てなきゃならない。いわば、公共投資は自分を現地の人々に忘れさせないためにやるわけだ。今後は、世界のどこにでも、永住できる日本人を養成することが大事ですね。

公文　四つ足対クラゲ論の花が大分咲きました

が、堺屋さんは、日本と外国との違いの問題を、どう見ておられますか。

堺屋　「日本だけが違う」という時に、どこがどう違うのか、その根本を理解しておかなければならないと思う。日本人が外国との違いを強調する時には、とかく表面的な、表現とか経済秩序とかいったことばかり重視して、本当の基本が分かっていないような気がする。このため、欧米とは違っても、同じアジアなら日本に近いだろうなんて思いがちだが、日本と東南アジアやアラブとの違いは、日本と欧米との差よりはるかに大きいんですね。

日本人と外国人――欧米人もアジア人も含めて――の一番の違いは倫理観じゃないでしょうか。つまり、日本人がいいと思っていることを、少しもいいことだと思わない人間もこの世界にはいる。しかも、それがある点では圧倒的多数なんです。

たとえば、日本人は全員、勤勉は最上の美徳だと思っているでしょうが、アラブやアフリカの人々はそう思っていない。勤勉が美点だというのはプロテスタンティズムか儒教思想の影響を受けた人々だけですから、その点ではアメリカやドイツのほうが、東南アジアやアラブより、ずっと日本に近いわけです。日本人が今後、国際的に活躍するためには、外国人と同じ倫理観を持つまでの必要はないにしても、少なくとも、自分たちと違った倫理観の持主がこの世に多いんだ、ということだけは理解せねばならないでしょう。

公文　それは確かに重要なポイントだと思います。さて、そこで日本人の対外適応力を高める、あるいは後顧の憂いなく外国での活躍ができるようにするための条件を考えてみると、どういうことがいえるでしょうか。

牛尾　外に出て活躍している人びとが日本に帰国する場合、中枢部に帰れるように国内環境を整備する必要がある。

中嶋　それはひじょうに大事なことだと思います。企業だけでなく、外務省においてもそうだと思う。在外の外交官がつねに顔を東京・霞が関に向けて、次の任地を案じているのでは、絶対に外交はうまくいかない。現地主義が必要と同時に、国際社会に対応できる日本国内の受けざらの変革が大事だと思う。

牛尾　いまの外交官の昇進制度は海外1等書記官――国内課長補佐――海外参事官――国内課長――海外公使――国内局長といった具合でないと、偉くなれない。そうではなく、海外勤務のまま公使までいって、帰国するときには、国内局長ポストに昇進できるルートがあってもいいと思う。

木村　現実には、海外勤務が長くなるとむずかしい問題はでてくる。親と子の隔りがでてくることだ。本人は現地語を話せるけれども、真にうまいとはいえない。ところが子どもの場合、すぐ現地語を覚えちゃう。そうなると、親は子どものいっていることが理解できなくなる。そのことに、ひじょうな恐怖感をおぼえるわけです。そういう意味での苦しみは残されると思う。

対外交渉力のなかに日本文化を！

牛尾　海外に長くいると、帰国してから日本のつまらない価値尺度で失敗するんですよ。ちょっとした礼節とか、しゃべり方とかでね。上座をすすめられても、1回は辞退しても、2回目にすわるとか。これは5回辞退すべきなのに、あいつは生意気だとかね(笑)。くだらない減点主義ではなく、得点主義の社会をつくるべきなのだが……。

堺屋　この問題は、たとえば単に昇進のルールをどうするといったことではすまないと思いますよ。現実には、現地に長くいてかなり高いポストで本省に戻るというケースもあることはありますからね。

問題はもっと基本的な社会構造、つまり日本人、特にエリートといわれる人は単一の組織、外務省とか商社とかどこでもいいけれども、ひとつの組織に単属的に所属し、その組織を出ればエリートでなくなる。それどころか、食って行けるかどうかさえあぶない。こういう単属性の社会にあるんじゃないでしょうか。だから、現地のために働きすぎて、本社での評価が悪くなることを恐れる。このために日本的倫理観を外国人に押しつけ、現地の倫理を踏みにじる。しかも、日本人は自分と違う倫理観を持った人間などいないと思っているから、それをあくなき善意でやっているわけです。

宗教でもなんでもそうですが、こっちのきらいなものを善意で押しつけて来るやつほど腹の立つものはありませんからね。東南アジアや南米の人たちに、勤勉になれ、企業忠誠心を持て、オレに見習えとい

うのは、全く迷惑で腹立だしいことなんでしょうね。

公文　木村さん。さっきいい残されたことがおありのようですが。

木村　下手をすると、優秀な人間は海外に出てしまって、日本は愚者の天国になる(笑)。今日、日本は世界秩序、とりわけ経済秩序のなかに巨大な鎖をつくっていながら、いわば栄養過多の巨大肥満児になっている。今後、日本は世界にどういう形で貢献しうるかを考える時代だと思う。

そのためには、日本は日本なりの文化を最大限に活用する必要がある。というのは、日本は島国だという関係上、これまでさまざまな外来文化の影響をうけながら、一度として、それに支配されなかった。ヨーロッパから科学技術文明は学んだけれども、キリスト教は受け入れなかった。日本文化はしたたかな面をもっているわけです。その意味では、敵は世界という外にあるのではなく、内にあるのかもしれない。

堺屋　ただ大事なことは、日本が外国文化を選択したように、外国もまた日本の文化、日本人の倫理観の中から選択する権利がある、ということを理解する必要がありますね。

中嶋　これが日本だというものをしゃちこ張って主張する必要はないと思いますが、いえることは、対外交渉力のなかに、ある種の自信をもってないと、交渉にはならないということだ。コンプレックス、たとえば中国があたかもすばらしい世界であるかのような感じをもっていると、交渉力は弱まってしまう。擁護すべき値打ちのあるものに対しては、胸を堂々と張る気概をもつべきだと思う。

いい換えるならば、日本独自の政治、経済、文化を対外交渉力のなかにリンケージすれば、外交的な交渉能力はあがる。日本の醜い政権交代劇というが、中国の政変劇に比べると、これほどかわいらしいものはない（笑）。

こういった政治的文化は国際的な対外関係のなかに組みいれていくような知恵がほしい。それができれば、日本は意外に乱世に生きる知恵を発見できるのではないか。

公文　世代論からはじまって、日本文化の根本にもふれるようなところまで話が発展してきました。もっともっと議論を深めたいのですが、お開きにしたいと思います。

身近なところであなたのお役に……

全国ネットの
日通商事リース

〈リース取扱い物件〉
事務機器、通信機器、運搬輸送機器、生産機械設備、流通合理化機械、商業設備、医療機器・計測機器、公害防止機器、その他、通産省制度リース対象機器

社会のニーズに応える
日通商事
リース部
本社/東京都千代田区外神田3-12-9(日通ビル)
☎(03)253-1111(大代表)

第65巻 2 号　毎週土曜日発行　昭和52年 1 月 8 日発行　大正 2 年 5 月10日第 3 種郵便物認可　昭和50年 4 月22日　国鉄首都特別扱承認雑誌第2242号

週刊ダイヤモンド®

企業戦略に携わるビジネスリーダーの雑誌

'77 1-8 新春特別号

'77年 全面予測！
日本のブレーン20人による 分析と警告

昭和世代座談会 "クラゲ社会日本"を斬る
中嶋嶺雄/堺屋太一/牛尾治朗/木村尚三郎/公文俊平

'77年の異色15社 戦略総点検
〈フォーブス誌特約〉

経済学はインフレを克服できない

動乱期の経営者に問う 松下幸之助

特価
480円

週刊ダイヤモンド 2 '77-1-8 ■'77年 全面予測！— 日本のブレーン20人による分析と警告／動乱期の経営者に問う 松下幸之助